

## 第5回湿地学会発表要旨

- ・ 標題： 湧水湿地の保全・活用と地域社会
- ・ 氏名： 富田啓介
- ・ 所属： 名古屋大学大学院環境学研究科
- ・ 本文：

東海地方から瀬戸内地方にかけての丘陵地には、泥炭の蓄積に乏しい、貧栄養の湧水によって形成された小湿地が数多く分布しており、湧水湿地と呼ばれている。湧水湿地には、シデコブシ・シラタマホシクサのような地域固有種や、サギソウ・ムラサキミミカキグサのような絶滅危惧種が多く分布しており、日本の生物多様性を支えている。

ほとんどの湧水湿地の周囲は里山（薪炭林や採草地）であり、湧水湿地はその存在する地域の人の営為との密接な関わりのもとに形成され、存続してきた（富田 2012）。また、湧水湿地に生育する植物種の中には、地域住民が日常的に目にし、親しんでいたものもある（富田 2006）。こうした地域社会と湧水湿地とのかかわりを整理すると、空間的・心理的な近接性に基づく「場所を介した関わり」の中に、湿地内での採草や森林利用といった「生態的システムを介した関わり」が存在しているととらえることができる。

今日行われている湧水湿地の保全・活用に関する活動をみると、多くの場合、基本的にこの伝統的な関わりが踏襲されている。活動を担う主体は、湧水湿地の存在する地域の居住者で構成されていることが多く、集落や市町村といったよりローカルな地域との関わりが強い。また、行われている活動は、集水域の森林管理や湿地内の草刈といったように、かつての生態的システムを介した関わりを代替したものが含まれている。

以上のことは、湧水湿地の保全と活用にあたっては、地域社会の理解と協力がとりわけ重要であることを示唆している。また一方で、地域社会が専ら保全・活用を担うことは、情報が狭い地域内にとどまりがちとなる負の側面も持つ。今後、湧水湿地について、保全・活用に関わる知識・技術を蓄積すること、生態系ネットワークを考慮した広域的な保全計画を立案すること、より多くの人々に湧水湿地の存在を知ってもらい保全・活用の世論を醸成することが重要であるが、これを推進するためには、個々の保全・活用を担う団体が積極的に情報発信をすることや、保全・活用団体間の交流が活発化することが望まれる。

なお本発表の内容は、E-journal GEO（日本地理学会の電子ジャーナル）に同じ標題の解説記事として投稿中である。

## 文献

富田啓介 2012： 湧水湿地をめぐる人と自然の関係史 ―愛知県矢並湿地の事例―. 地理学評論 85 : p85-105.

富田啓介 2006： 知多～尾張丘陵におけるシラタマホシクサと地域住民のかかわりの変遷(昭和初期～現代). 愛知 県史研究 10 : p151-160.